

氏 名	鴨 井 清 隆 かも い きよ たか
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 124 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Cortisone のリンパ球生成、放出に及ぼす影響に関する 研究補遺

調文調査委員 (主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

Dougherty らの研究によって、副腎皮質ホルモンのうち、ある特定の構造式のものは、きわめて著しいリンパ球ならびにリンパ組織に対する作用を示し、その注射によってきわめて短時間内に一過性の血中リンパ球減少を来し、その作用機序はおそらくリンパ球に対する直接変性効果にあるものと思われる。

著者は本論文において、従来正確な研究の少なかった中枢および末梢リンパ量に及ぼす Cortisone の作用を研究し、あわせてリンパ内リンパ球数の検討をも試みた。

末梢血において従来白血球数の日中変動のあることが知られているが、まず著者は予備実験として中枢および末梢リンパ球数の日中変動を調べたが、リンパ球は比較的安定な細胞であり、若干日中変動を示すが、本研究の目的とするような一時間以内の変動を目的とする場合には、重要な Factor とはなり得ないものと考えた。

次に健常成熟家兎の胸管リンパについて、1時間リンパ量 0.75 ml, 1 cmm リンパ中リンパ球数 4 万, 1時間流出リンパ球総数, 30×10^6 の数値を得た。次に膝窩輸出リンパについては、その正常値はリンパ量 1時間 0.73 ml, 1 cmm リンパ球数 7200, 1時間流出リンパ球総数 5.3×10^6 を得た。

次に Cortisone 投与例では胸管リンパについてはリンパ量 1時間値 0.75ml, 1 cmm リンパ中リンパ球数 26000, 1時間流出リンパ球総数 19.6×10^6 で大体 $\frac{2}{3}$ 程度に減少しており、その原因は単位リンパ中のリンパ球数の減少に基づいており、リンパ量自体にはほとんど影響がないことが判った。末梢リンパについては Cortisone 投与例ではリンパ量 1時間値 0.74 ml, 1 cmm 中リンパ球数 4160, 1時間流出リンパ 3.1×10^6 であり、中枢リンパ同様の関係にあることが判った。

要するに中枢、末梢リンパを問わず、Cortisone 投与例ではリンパ量には著変がないが、単位リンパ量中のリンパ球数の著減があり、そのため単位時間流出リンパ球数の著減を招来していることが判った。

論文審査の結果の要旨

Dougherty らの研究によって、副腎皮質ホルモンのうち特定の構造式を有するものは、その投与によってきわめて短時間持続する一過性の著明な血中リンパ球減少症を示すが、間もなく回復する。その作用機序はリンパ球に対する直接変性効果によるものと推論される。

著者は本論文において、近時開発された標準リンパ採取法によって、従来正確な研究の少なかったリンパ内リンパ球に対する Cortisone の影響、とくにリンパ量におよぼす効果を決定した。

健常成熟家兎の胸管リンパについての標準1時間値は著者によれば、リンパ量 0.75ml, 1cmm リンパ中リンパ球数 4万, 流出リンパ球数 30×10^6 であった。これに対して Cortisone 投与例では1時間値はリンパ量 0.75ml, 1cmm 中リンパ球数 26,000 流出リンパ球数 196×10^6 であった。

末梢リンパ、すなわち膝窩輸リンパでは正常1時間値, 0.73ml, 7200, 5.3×10^6 で、Cortisone 投与例では、0.74ml, 4160, 3.1×10^6 であった。

したがって中枢、末梢リンパを問わず、注射1時間値はそれぞれ $\frac{2}{3}$ 程度に減少しており、その主因は単位リンパ内リンパ球数の減少にあり、リンパ流量の変化によるものでないことがわかった。

以上著者の論文は学術上有益であり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。